

アルダナーリーシュヴァラによる創造神話の考察

文学研究科仏教学専攻博士後期課程2年

澤田 容子

はじめに

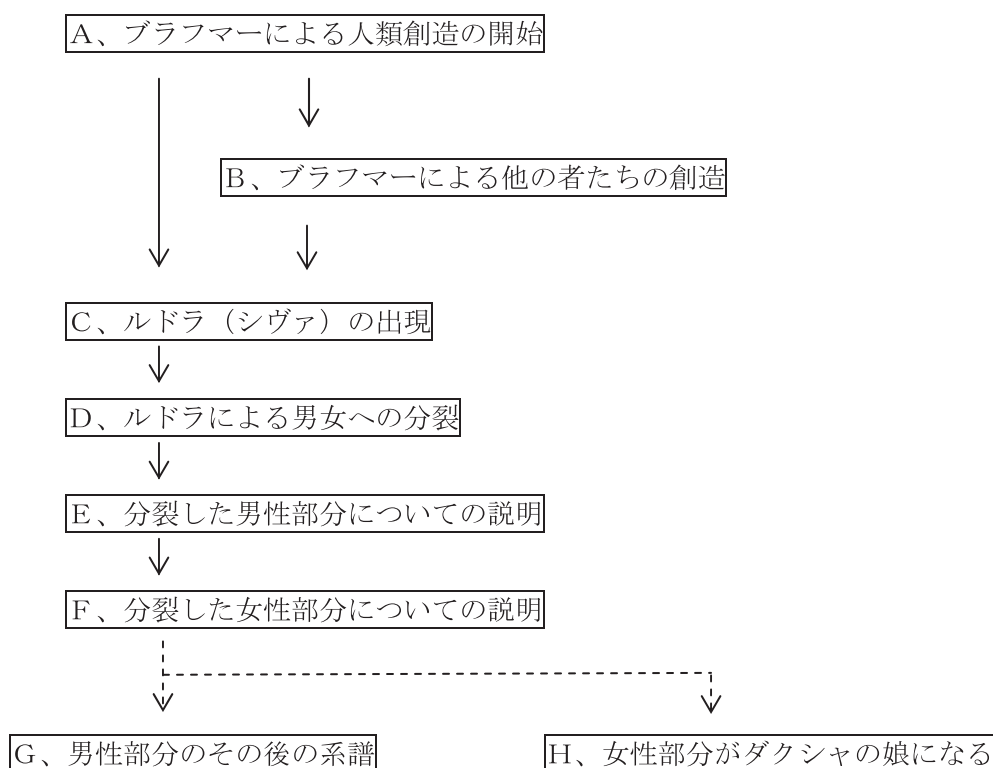
シヴァ神の化身であるアルダナーリーシュヴァラ (ardhanārīśvara) 神は、シヴァとシヴァの配偶神が結合した両性具有型の神である。この神はヒンドゥー文化圏ではポピュラーな神で、図像や文献が多数残されている。本論文ではアルダナーリーシュヴァラが創造のために男女に分裂する神話を取り扱う。この神話は人類創造神話の一種であり、ヒンドゥー神話においてこの神話ほどヴァラエティー豊かに発達した人類創造神話は少なく、貴重であると言える。さらにアルダナーリーシュヴァラというモチーフは、後代になると、その独特な姿からか、創造という役割を超えて夫婦愛や性愛などをも象徴するようになる。それゆえ、アルダナーリーシュヴァラ研究には、創造神話研究、カーマ研究、女性学の研究など様々な分野への寄与が期待できるだろう。

使用する文献はプラーナと称される聖典群で、様々な地域、時代にわたって編纂され、1つの神話素に対し多くのヴァリエーションを含んでいる。本論文では、9つのプラーナ聖典¹中の12か所の記述を取り上げて考察する。まず、12の記述の中から共通する登場人物、行為などに従って8つの要素 (A~H) を取り出し、それらの相違を比較する。その後、8つの要素の配置を基にして、物語全体の流れを3パターンに分類し、この神話がどのように発展していったのか考察する。

I. アルダナーリーシュヴァラによる創造神話の8つの構成要素

神話を構成する8つの要素を物語の流れに沿って並べると以下ようになる。

表1 神話を構成する8つの要素の配置



これが本論文で取り扱う神話の全体像である。多少の同異や欠落はあるものの、12か所全ての記述に上記の流れが見て取れた。F以降の点線矢印は、物語の結末が、Fで終わるもの、Gで終わるもの、Hで終わるものの3パターンあることを意味する。これについての考察は後述する。まずは、8つそれぞれの要素に該当する記述を原文より抜粋し、類似した内容ごとに分類する。なお紙幅の関係上、類似のものは註に当該箇所を挙げることにする。

A. ブラフマーによる人類創造の開始

この神話の起点となる要素である。ブラフマーが世界創造を進める過程で、人類の創造に着手するという内容である。ブラフマーが生類を創造するものの、創造された者たちが増えず創造が進まないパターン（A1、A2）や、ブラフマーが創造のために苦行を行うパターン（A2～A4）など多くの記述で創造の困難さが描かれている。

A1. ブラフマーが生類を創造するが、創造した生類が増えない。

evam bhūtāni sṛṣṭāni carāṇi sthāvarāṇi ca .
 yadāsyā tāḥ prajāḥ sarvā na vyavardhanta dhīmataḥ ,
 athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmāno 'sṛjat . (Viṣṇu-purāṇa 1. 7. 3-4)

このように、〔ブラフマーによって〕動くものや動かないものという存在が生み出され

た。彼の思考〔によるもの〕だったにもかかわらず、これら全ての生類が増えなかった
ので、〔ブラフマーは〕自分に似た心から生まれた他の息子たちを創った²。

- A2. ブラフマーが生類を創造するが、それらが増えなかったので、シヴァに対して苦行する。

na vyavardhamta loke 'smin prajāḥ kamalayoninā ,

vṛddhyartham bhagavān brahmā putrair vai mānasaiḥ saha .

duścaram vicacāreṣam samuddiśya tapaḥ svayam . (*Liṅga-purāṇa*41. 7-8a)

蓮華から生まれた者（ブラフマー）によって〔創られた〕生類は、この世界で増えな
かった。ブラフマー神は〔生類を〕増やすために、心から生まれた息子たちと共に、〔シ
ヴァ〕神に対して、自身で厳しい苦行をした。

- A3. ブラフマーが創造のために苦行する。

evaṃ sṛṣṭvā maricyādīn devadevaḥ pitāmahaḥ ,

sahaiva mānasaiḥ putrais tatāpa paramam tapaḥ . (*Kūrma-purāṇa*1. 11. 1)

このようにマリーチなどを創造してから、神々の神である祖父（ブラフマー）は、心か
ら生まれた息子たちと共に、最高の苦行をした。

sṛṣṭvaitad akhilaṃ brahmā punaḥ kalpāṃtare prabhuḥ .

sahasrayugaparyamtaṃ saṃsupte ca carācare ,

prajāḥ sraṣṭumanās tepe tata ugraṃ tapo mahat . (*Liṅga-purāṇa*41. 37b-38)

ブラフマー神は、他の（前の）カルパにおいて、動くものや動かないものの全てを創造
した後、千ユガ期の間眠り、〔その後目が覚めて〕生類を創りたいと考え、それから非
常に過酷な苦行をした。

- A4. ブラフマーが創造を促され、シヴァに対して苦行する。

nabhovāṇī tadābhūd vai sṛṣṭiṃ mithunajāṃ kuru ,

tac chrutvā maithuniṃ sṛṣṭiṃ brahmā kartum amanyata .

その時、「一対（夫婦）から生み出す創造をなせ。」〔という〕天からの声があった。そ
れを聞いて、ブラフマーは性交による創造をすることを考えた。

prabhāveṇa vinā śaṃbhor na jāyerann imāḥ prajāḥ ,

evaṃ saṃcintayan brahmā tapaḥ karttuṃ pracakrame .

śivayā parayā śaktyā saṃyuktaṃ paramēśvaram ,

saṃcintya hṛdaye prītyā tepe sa paramam tapaḥ . (*Śiva-purāṇa*3. 3. 3, 5-6)

「吉祥たる者（シヴァ）の創造力なしには、これらの生類は生まれまいだろ。」そのように考えたブラフマーは、苦行をし始めた。最高のシャクティであるシヴァーと結合したパラメーシュヴァラ（シヴァ）を、心の中で喜んで考え、彼（ブラフマー）は最高の苦行をした。

A5. ブラフマーとシヴァが創造行為を譲り合う。

brahmā dṛṣṭvābravid enaṃ mā srākṣīr idṛśīḥ prajāḥ ,
sraṣṭavyā nātmanas tulyāḥ prajā deva namo 'stu³ te .
anyāḥ sṛja tvam bhadraṃ te prajā vai mṛtyusaṃyutāḥ ,
nārapsyaṃte hi karmāṇi prajā vigatamṛtyavaḥ .
evam ukto 'bravid enaṃ nāhaṃ mṛtyujarānvitāḥ ,
prajāḥ srakṣyāmi bhadraṃ te sthito 'haṃ⁴ tvam sṛja prajāḥ .
ete ye vai mayā sṛṣṭā virūpā nilalohitāḥ .

ブラフマー神はその者（ルドラ＝シヴァ）を見て言った。「そのような（前文でルドラの描写がされている）生類を創るな。〔汝〕自身に似た生類を創るべきではない。神よ、汝に敬礼す。汝に幸あれ。汝は他の死を伴う（死すべき）生類を創りなさい。死の来ない生類は、儀式を執り行わないだろ。」このように言われた彼（ルドラ）は、彼（ブラフマー）に言った。「私は、死や老が訪れる生類を創らないだろ。あなたに幸あれ。私は留まるので、あなたが生類を創りなさい。」

evam uktas tadā brahmā mahādevena dhimatā ,
pratyuvāca namaskṛtya hṛṣyamāṇaḥ prajāpatiḥ .
evaṃ bhavatu bhadraṃ te yathā te vyāhṛtaṃ vibho ,
brahmaṇā samanujñāte tathā sargam abhūt kila . (*Liṅga-purāṇa*70. 314-317a, 321-322)

このように、賢者である偉大な神（ルドラ）に言われた創造主ブラフマーは、敬礼して、喜んで答えた。「汝に言われた通り、そのようにしよう。汝に幸あれ。遍在する者よ。」〔そのように〕ブラフマーによって認められた時、創造が起こった。

A6. 創造を進めている過程。

navadhā sṛṣṭir utpannā brahmaṇo 'vyaktajanmanaḥ .

未顕現から生まれたブラフマーの9種の創造が起きた。

tasyādau tatra vaṃṣe tu jagad etac carācaram . (*Varāha-purāṇa*2. 42a, 46b)

そこで、彼（プラジャーパティ）の系譜の最初に、この動くものや動かないものから成る世界が〔生じた〕。

B. ブラフマーによる他の者達の創造

ブラフマーがルドラ（シヴァ）を創造する以外に他の者たちを創造するという要素である。他の者たちの中には、マリーチたち（ブリグ、プラステイヤ、プラハ、クラトゥ、アンギラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァシシュタの9人）、サンカルパ、ダルマ、アダルマ、サナンダナたち（サナンダナ、サナカ、サナータナ、サナトクマーラの4人）、リブなどが含まれる。この中でダクシャは、この要素では特に目立った存在ではないが、後のGとHの要素において単独で再登場する。

Bの要素では、ブラフマーが創造した他の者たちが世界創造に無関心であったために、創造が進まないとする記述（B1）が引き金となって、このことに対し怒ったブラフマーのその怒りからアルダナーリーナラ（ルドラ）が出現するという記述につながっていくものがある。

B1. マリーチなど様々な者たちを創造するが、皆、創造行為に関心がなく、その後の創造が進まない。

athānyān mānasān putrān sadṛśān ātmano 'sṛjat ,

bhṛguṃ pulastyam pulahaṃ kratum āṅgirasam tathā .

marīciṃ dakṣam atrīṃ ca vasiṣṭhaṃ caiva mānasam .

それから彼は、自分に似た、心から生まれた他の息子たちを創った。ブリグ、プラステイヤ、プラハ、クラトゥ、アンギラス、マリーチ、ダクシャ、アトリ、ヴァシシュタこそが〔その〕心から生まれた息子たちである。

tato 'sṛjat punar brahmā rudraṃ roṣātmasambhavam ,

saṃkalpaṃ caiva dharmam ca pūrveṣām api pūrvajāḥ .

agre sasarjja vai brahmā mānasān ātmanaḥ samān ,

sanandanam sasanakam vidvāṃsam ca sanātanam .

sanatkumāram ca vibhuṃ sanakam ca sanandanam .

そのあとさらに、祖先の中の祖先ブラフマーは、自身の怒りから生まれたルドラと、サンカルパ、ダルマを創った。初めに、ブラフマーは自身に似た心から生まれた息子たち、サナンダナとサナカと博識なサナータナと遍在し古より存在し喜び溢れるサナトクマーラ⁵を創った。

sarve te hy āgatajñānā vitarāgā vimatsarāḥ ,

teṣv evaṃ nirapekṣyeṣu lokavṛttānukāraṇāt .

hiraṇyagarbho bhagavān parameṣṭhī hy acintayat ,

tasya roṣāt samutpannaḥ puruṣo 'rkkasamadyutiḥ ,

arddhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ . (Vāyu-purāṇa9. 62-63a, 64-66a, 67-68)

彼らは皆、未来の知識を持ち、執着から離れ、嫉妬をしなかった。このように、彼らが、

世界の〔生産〕活動に無関心であったので、金色の胎児である神パラメーシュティン（最高の者ブラフマー）は困惑（熟考）した。彼の怒りから、人が生まれた。〔その者は〕太陽に等しい輝きを持ち、半身に女性を持つ男性の姿であり、〔光輝の〕力によって最高に輝いていた⁶。

B2. マリーチたちを創造し、皆で苦行を行う。

nārāyaṇākhyo bhagavān yathāpurvaṃ prajāpatiḥ ,

marīcibhṛgvaṅgirasah pulastyam pulahaṃ kratum .

dakṣam atrīṃ vasiṣṭhañ ca so 'srjad yogavidyayā . (*Kūrma-purāṇa*1. 10. 88-89a)

かのナーラーヤナと呼ばれる創造神は、以前のように、マリーチ、ブリグ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ダクシャ、アトリ、ヴァスイシュタをヨーガの知識によって創造した。（この後、ブラフマーと一緒に苦行し、その結果ブラフマーがルドラを生み出す⁷。）

B3. マリーチなど様々な者たちを創造する。

purastād asṛjad devaḥ sanamdam sanakaṃ tathā ,

sanātanam munisreṣṭhā naiṣkarmyeṇa gatāḥ param .

marīcibhṛgvaṅgirasah pulastyam pulahaṃ kratum ,

dakṣam atrīṃ vasiṣṭham ca so 'srjad yogavidyayā .

初めに神は、サナンダ、サナカ、サナータナを創った。最高の聖仙よ。活動しないことで〔彼らは〕最高の境地を得た。彼は、ヨーガの知識によって、マリーチ、ブリグ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ダクシャ、アトリ、ヴァスイシュタを創った。

saṃkalpaś caiva dharmas ca hy adharmo dharmasamnidhiḥ .

〔さらに〕サンカルパとダルマと、ダルマのそばにいるアダルマがいる。

ṛbhūṃ sanatkumāraṃ ca sasarpādau sanātanah . (*Līṅga-purāṇa*5. 9-10a, 12a, 13a)

そして、永遠〔の神〕はリブとサナトクマーラを創った⁸。

C. ルドラの出現

ルドラが出現する様子を示した要素である。ブラフマーの怒りから出現するというパターン（C1）の多くが、AとBの要素において創造が進まずブラフマーが怒ることを要因にしている。ブラフマーの苦行により出現するパターン（C2、C3、C4）では、創造のためにブラフマーが苦行することを要因にしている。これについては、全12か所の記述のうち、5か所がブラフマーの怒りを、6か所がブラフマーの苦行を要因としている。Cの要素には炎の記

述も多く見られることから、怒りによる熱、苦行による熱、炎による熱など、熱というものがルドラ誕生の必須要件と考えられているといえることができる。

C1. ブラフマーの怒りによってルドラが生まれる。

teṣv evaṃ nirapekṣeṣu lokasṛṣṭau mahātmanaḥ .
brahmaṇo 'bhūn⁹ mahān krodhas trailokyadahanakṣamaḥ ,
tasya krodhāt samudbhūtajvālāmālātīdīpitam ,
brahmaṇo 'bhūt¹⁰ tadā sarvaṃ trailokyam akhilaṃ mune .
bhrakuṭikuṭīlāt tasya lalāṭāt krodhadīpitāt ,
samutpannas tadā rudro madhyāhnārkasamaprabhaḥ .
ardhanārīnaravapuḥ pracaṇḍo 'tīsarīravān . (*Viṣṇu-purāṇa*1. 7. 10b-13a)

このように、彼ら（サナンダナなど）が世界創造に無関心であったので、偉大な魂を持つブラフマーは、三界を燃やすことが出来るほど大きな怒りを感じた。ブラフマーの怒りから、燃える炎の輪が生じ、三界全てに満ちた。聖仙よ。怒りに燃え、眉をしかめた彼の額から、その時、真昼の太陽に等しい輝きを持つ、半身に女性を持つ男性の姿の、獯猛で大きな体を具えたルドラが生まれた¹¹。

teṣv evaṃ nirapekṣyeṣu lokavṛttānukāraṇāt .
hiraṇyagarbho bhagavān parameṣṭhī hy acintayat ,
tasya roṣāt samutpannaḥ puruṣo 'rkkasamadyutiḥ ,
arddhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ . (*Vāyu-purāṇa*9. 67b-68)

このように、彼らが、世界の〔生産〕活動に無関心であったので、金色の胎児である神パラメーシュティン（ブラフマー）は困惑（熟考）した。彼の怒りから、人が生まれた。〔その者は〕太陽に等しい輝きを持ち、半身に女性を持つ男性の姿であり、〔光輝の〕力によって最高に輝いていた。

jahau prāṇāṃś ca bhagavān krodhāviṣṭaḥ prajāpatiḥ ,
tataḥ prāṇamayo rudraḥ prādūrāsīt prabhor mukhāt . (*Līṅga-purāṇa*41. 42)

怒りに満ちた創造神は〔自身の〕呼吸（生命）を捨てた。そして、神の口から、呼吸（生命）から成るルドラが現れた。

C2. ブラフマーが苦行していたとき生まれる。

tasyaiva tapato vakrād rudraḥ kālāgnisambhavaḥ ,
trīśūlapāṇīr īśānaḥ prādūrāsīt trilocanaḥ . (*Kūrma-purāṇa*1. 11. 2)

ちょうど彼（ブラフマー）が苦行をした時、鼻から、世界を破壊する炎から生まれ三叉戟を持つイーシャーナであり三眼を持つルドラは生まれた。

tapas tepe prajānātho vedoccāraṇataparāḥ ,
atharvavedoccarāṇaṃ yāvac cakre pitāmahaḥ .
mukhād rudraḥ samabhavad raudrarūpo bhavāpahaḥ ,
arddhanārīnaravapur duṣprekṣyo 'tibhayaṃkaraḥ . (*Skanda-purāṇa*7. 2. 9. 5-6)

ヴェーダの朗唱に通曉した祖父である創造主（ブラフマー）は、苦行をし、アタルヴァヴェーダの唱句を創った。〔ブラフマーの〕口から、恐ろしい姿をした者であり、破壊から生まれた者であり、見るのが困難な（醜い）者であり、大きな恐怖を感じさせる、半身に女性を持つ男性の姿のルドラが生まれた。

C3. シヴァがブラフマーの苦行に満足し、変化する。

tuṣṭas tu tapasā tasya bhavo jñātvā sa vāñchitam .
lalāṭamadhyam nirbhidyā brahmaṇaḥ puruṣasya tu ,
putras te 'ham¹² iti procya strīpūmrūpo 'bhavat¹³ tadā . (*Liṅga-purāṇa*41. 8b-9)

そして、かの〔シヴァ〕神は、彼（ブラフマー）の苦行に満足し、〔ブラフマーの〕願いを知り、ブラフマー神の額の中央を貫き、「私はお前の息子である。」と言って、女性と男性を兼ね備えた姿になった。

tīvreṇa tapasā tasya saṃyuktasya svayaṃbhavaḥ ,
acireṇaiva kālena tutoṣa sa śivo drutam .
tataḥ pūrṇacidīśasya mūrtim āviśya kāmādām ,
arddhanārīnaro bhūtvā tato brahmāntikaṃ haraḥ . (*Śiva-purāṇa*3. 3. 7-8)

かの自生者（ブラフマー）が、厳しい苦行に専念していたので、すぐさま、かのシヴァ神は満足した。そこで、全知の神（シヴァ）が願いを叶える姿をとって、ハラ（シヴァ）は半身に女性を持つ男性となり、ブラフマーに近づいた。

C4. もとからアルダナーリーナラであり、苦行をしている。

tataḥ prabhṛti deveśo na cāsūyata vai prajāḥ ,
ūrdhvaretāḥ sthitaḥ sthāṇur yāvad ābhūtasamplavam .

それ以来、神々の神（ルドラ＝シヴァ）は、生類を生み出さなかった。生類の破滅が起こるまで、スターヌ（不動者）は禁欲生活を保ったままでいた。

eṣa devo mahādevaḥ puruṣo 'rkasamadyutiḥ¹⁴ .

ardhanārīnaravapus tejasā jvalanopamaḥ . (*Līṅga-purāṇa*70. 323, 324b-325a)

このマハーデーヴァ神プルシャは、太陽に等しい輝きを持ち、半身に女性を持つ男性の姿であり、輝きにおいて炎に等しい者であった。

D. ルドラによる男女への分裂

アルダナーリーナラが男女に分裂する過程を述べた要素である。ここで重要なのは、ブラフマーからシヴァへの創造者という役割の移行であると考えられる。Dの要素には、ブラフマーに命じられて分裂するパターン（D1、D2）と、自分で分裂するパターン（D3、D4）がある。特に「自分の意思に従って」分裂するパターン（D4）では、分裂する、すなわち増殖することをアルダナーリーナラ自身の意思で行っており、創造者としての自覚が表されている。他に、ブラフマーがアルダナーリーナラに分裂を命じたあと消えるパターン（D1）やアルダナーリーナラ自身で分裂したのちブラフマーを燃やすパターン（D3）も、創造者という役割がブラフマーからシヴァへ移行したことを表していると言えるだろう。

D1. ブラフマーが男女に分裂するように命じ、消える。

sarvaṃ tejomayaṃ jātam ādityasamatejasam ,

vibhajātmānam ity uktvā tatraivāntaradhiyata .

evam uktvā dvidhā bhūtaḥ pṛthak strī puruṣaḥ pṛthak . (*Vāyu-purāṇa*9. 69-70a)

「全てが輝いた状態で太陽に等しい輝きを持つ〔汝〕自身を分けよ。」と言って、まさにそこから〔ブラフマーは〕消えた。このように言われ、〔ルドラは〕別々に男性と女性の2つになった。

vibhajātmānam ity uktvā brahmā cāntarddadhē bhayāt .

tathokto 'sau dvidhā strītvam puruṣatvam tathākarot . (*Kūrma-purāṇa*1. 11. 3b-4a)

「〔汝〕自身を分けよ。」と言って、ブラフマーは恐れから消えた。そして、このように言われ、その者は、女性要素と男性要素の2つを創った¹⁵。

D2. ブラフマーが男女に分裂するように命じる。

ardhanārīśvaraṃ dṛṣṭvā sargādau kanakāṃḍajāḥ ,

vibhajasveti cāhādau yadā jātā tadābhavat . (*Līṅga-purāṇa*5. 28)

創造の初めに、黄金の卵から生まれた者（ブラフマー）である創造者がアルダナーリーシュヴァラを見て、「〔汝を〕分けよ」と言った時に、そのように彼は〔2つに〕なった。

D3. ヨーガによって分裂し、ブラフマーを燃やす。

dadāha bhagavān sarvaṃ brahmāṇaṃ ca jagadgurum .

athārdhamātrāṃ kalyāṇīm ātmanaḥ parameśvarīm ,

bubhujе yogamārgеṇa vṛddhyartham jagatām śivaḥ . (*Liṅga-purāṇa*41. 10b-11)

神（アルダナーリーシュヴァラ）は、全世界の師ブラフマーを燃やした。それから、世界の繁栄（増殖）のためにシヴァはヨーガの道（手段）によって〔分裂し〕、自身の半分の部分であり、安寧をもたらすパラメーシュヴァリーを享受した。

D4. シヴァ自身の意思で分裂する。

svecchayāsau dvidhā bhūtaḥ pṛthak strī puruṣaḥ pṛthak . (*Liṅga-purāṇa*70. 325b)

自身の意思に従って、その者は、別々に女性と男性の2つになった。

tapasā tena tuṣṭo 'smi dadāmi ca tavepsitam .

ity uktvā paramodāraṃ svabhāvamadhuraṃ vacaḥ ,

pṛthak cakāra vapuṣo bhāgād devīm śivām śivaḥ . (*Śiva-purāṇa*3. 3. 12b-13)

その苦行に私（シヴァ）は満足したので、あなた（ブラフマー）の望むものを与えよう。」と、最高に慈悲深い自然で甘美な言葉を述べた。シヴァは、吉祥な体からシヴァー女神を別にした。

D5. 分裂の理由や原因の記述がない。

ardhanārīśvaro¹⁶ bhūtvā bālārkaśadyutiḥ ,

tadaikādaśadhātmānaṃ pravibhajya vyavasthitaḥ . (*Liṅga-purāṇa*41. 43)

〔ルドラは〕朝日に等しい輝きを持つアルダナーリーシュヴァラとなり、それから、自身を11〔の部分〕に分けて、とどまった。

E. 分裂した男性部分についての説明

分裂した後の男性半身についての記述を集めた要素である。11に分かれるという内容が基本となっている。多数の者に分かれることで、そこから人類が発展したことを示していると思われる。さらに黒い者や白い者、優しい者など様々なに分かれるパターン（E2）では、様々な特徴を加えることで部族や人種の区別を反映させているとも考えられる。

E1. 11に分かれる。

ardhanārīśvaro¹⁷ bhūtvā bālārkaśadyutiḥ ,

tadaikādaśadhātmānaṃ pravibhajya vyavasthitaḥ . (*Liṅga-purāṇa*41. 43)

〔ルドラは〕朝日に等しい輝きを持つアルダナーリーシュヴァラとなり、それから、自身を11〔の部分〕に分けて、とどまった¹⁸。

E2. 11に分かれ、さらに様々な者に分かれる。

bibheda puruṣatvañ ca daśadhā caikadhā tu saḥ .

saumyāsaumyais¹⁹ tathā śāntaiḥ puṁstvaṃ strītvañ ca sa prabhuḥ ,

bibheda bahudhā devaḥ puruṣair asitaiḥ sitaiḥ . (*Mārkaṇḍeya-purāṇa*50. 11b-12)

彼は、男性要素を11に分けた。そして、その神は、男性要素と女性要素を、優しい者や粗野な者、穏やかな者に〔分けた〕。神は、多様に、黒い者や白い者に分けた²⁰。

F. 分裂した女性部分についての説明

Dにおいて分裂した後の女性半身についての記述を集めた要素である。優しい者、粗野な者、黒い者などに分かれるというパターン（F1）があるが、それはE2の後半と一致した内容であり、E2同様に部族や人種の区別を反映させていると思われる。分裂した女性半身が、全ての女性の源の存在として描かれるパターン（F2）も同様な意味があるだろう。それ以外に、女性半身が女神になるパターン（F3）もある。このパターンの記述では内容に少しばらつきがあるが、女性半身が女神となった（もしくはもとから女神であった）とする中に、優しい者や黒い者などに分裂するという描写や、様々な女性や女神が創られるとする描写がもりこまれているものが多く、ここでも部族や人種の区別を反映させている。

F1. 様々な者に分かれる。

saumyāsaumyais²¹ tathā śāntaiḥ puṁstvaṃ strītvañ ca sa prabhuḥ ,

bibheda bahudhā devaḥ puruṣair asitaiḥ sitaiḥ . (*Mārkaṇḍeya-purāṇa*50. 12)

そして、その神は、男性要素と女性要素を、優しい者や粗野な者、穏やかな者に〔分けた〕。神は、多様に、黒い者や白い者に分けた²²。

F2. 女性部分から全ての女性が生まれたとする。

tasyāś caivāṃśajāḥ sarvāḥ striyas tribhuvane tathā . (*Liṅga-purāṇa*5. 29a)

三界における全ての女性はその女性の部分から生まれた。

F3. 女神になる。

saumyāsaumyais tathā śāntāśāntaiḥ strītvañ ca sa prabhuḥ ,

bibheda bahudhā devaḥ svarūpair asitaiḥ sitaiḥ .

tā vai vibhūtaḥ viprā viśrutāḥ śaktayo bhuvī ,

lakṣmyādayo yad vapuṣā viśvaṃ vyāpnoti śāṃkarī .

vibhajya punar īśānī svātmāmśam akarod dvijāḥ ,

mahādevaniyogena pitāmaham upasthitā .

tām āha bhagavān brahmā dakṣasya duhitā bhava ,

sāpi tasya niyogena prādurāsīt prajāpateḥ . (*Kūrma-purāṇa*1. 11. 6-9)

そして、その神は、女性要素を、優しい者や粗野な者、穏やかな者や騒がしい者、色黒の者や色白の者などたくさんに分けた。バラモンたちよ。ラクシュミーなどの者たちは、〔この〕地上で、遍在する者として、シャクティとして有名であった。シャーンカーリーはその姿によって、全〔世界〕に広がっている。再生者たちよ。さらに自分の部分に分けて〔創った〕イーシャーニーは、偉大な神（シヴァ）の命令により祖父（ブラフマー）に近づいた。ブラフマー神は彼女に「ダクシャの娘になれ」と言った。彼女は彼の命令により、創造者（ダクシャ）から生じた²³。

ardhenāmśena sarvātmā sarjāsau śivām umām ,

sā cāsṛjat tadā lakṣmīṃ durgāṃ śreṣṭhāṃ sarasvatīm .

vāmāṃ raudrīm mahāmāyāṃ vaiṣṇavīm vārijekṣaṇām ,

kalām vikariṇīm caiva kālīm kamalavāsinīm .

balavikariṇīm devīm balapramathinīm tathā ,

sarvabhūtasya damanīm sasṛje ca manonmanīm .

tathānyā bahavaḥ sṛṣṭās tayā nāryaḥ sahasraśaḥ . (*Linga-purāṇa*41. 44-47a)

〔自分の〕半身によって、全ての魂を持つ彼（アルダナーリーシュヴァラ）は、吉祥なウマーを創った。彼女はラクシュミー、最高の者ドゥルガー、サラスヴァティー、ヴァーマー、ラウドリー、マハーマーヤー、蓮華の目をした者ヴァイシュナヴィー、カラーヴィカリニー、蓮華に住む者カーリー、バラヴィカリニー女神、バラプラマティニー、サルヴァブータダマニー、マノーンマニーを創った。同様に彼女によって、何千もの他の多くの女性たちが創られた。

prāg uktā tu mahādevī strī saiveha satī hy abhūt .

そして、以前に述べたマハーデーヴィーが、世界の幸福のために、この世界でサティーという女性になった。

kāryārtham dakṣiṇam tasyāḥ śuklam vāmaṃ tathāsitam ,

ātmānam vibhajasveti proktā devena śaṃbhunā .

sā tathoktā dvidhā bhūtā śuklā kṛṣṇā ca vai dvijāḥ . (*Linga-purāṇa*70. 327a, 328-329a)

〔彼女は〕「〔創造の〕役割のために、その右半身を白い者に、左半身を同様に黒い者に、自身を分けよ。」とシャンブ神（シヴァ）に言われた。このように言われた彼女は、白い者と黒い者の2つになった。再生族の者たちよ²⁴。

prajānām eva vṛddhyartham tapas taptam tvayādhunā ,
tapasā tena tuṣṭo 'smi dadāmi ca tavepsitam .
ity uktvā paramodāram svabhāvamadhuram vacaḥ ,
pṛthak cakāra vapuṣo bhāgād devīm śivām śivaḥ .

今まさに、生類の繁栄のためにあなたによって苦行がなされた。その苦行に私は満足したので、あなたの望むものを与えよう。」と、最高に慈悲深い自然で甘美な言葉を述べた。シヴァは、吉祥な体からシヴァー女神を別にした。

brahmovāca .

śive nārikulam sraṣṭum śaktim dehi namo 'stu te ,
carācaram jagadviddhihetor mātāḥ śivaṃpriye (*Śiva-purāṇa*3. 3. 12-13, 20)

ブラフマーは言った。

シヴァーよ。動くものや動かないものを創る女性の系譜〔を得るための〕シャクティを与えたまえ。あなたに敬礼せん。世界創造の原因である母よ。シヴァの最愛の者よ。

tasyām hariṃ ca brahmāṇam sasarja paramēśvaraḥ ,
viśveśvaras tu viśvātmā cāstram pāsupatiṃ tathā .
tasmād brahmā mahādevyās cāmśajaś ca haris tathā ,
amḍajaḥ padmajaś caiva bhavāṃgabhava eva ca . (*Liṅga-purāṇa*41. 12-13)

パラメーシュヴァラ（シヴァ）と彼女はハリ（ヴィシュヌ）とブラフマーを創った。同様に、世界の魂である世界の主権神（シヴァ）は、パーシュパティという名の武器を〔創った。〕故にブラフマーとハリはマハーデーヴィーの一部から生まれた。そして卵から生まれた者であり、蓮華から生まれた者でもある者（ブラフマー）は、神の体から生まれた神でもある。

G. 男性部分のその後の系譜

Eの後続要素である。男性半身はスヴァーヤンブヴァ（自生者）という名で呼ばれ、シャタルーパーという名の女性を妻にする。シャタルーパーについては、『リンガプラーナ』5. 16において「スヴァーヤンブヴァから〔生まれたのであって〕」とあるように、ルドラの女性半身であることが示されるが、他の文献の記述には見られない。スヴァーヤンブヴァはシャタルーパーを妻にし、その後2人の息子と2人の娘に恵まれる。そのうちの2人の娘はそ

れぞれダクシャとルチと結婚する。ここでは、2人の娘の1人がアーケーティカリッディという名になっているが、いずれもルチと結婚することから、同一者と言える。

śatarūpām ca tāṃ nārīṃ taponirdhūtakalmaṣām ,
svāyaṃbhuvo manur devaḥ patnīve jagṛhe prabhuḥ .

tasmāt tu puruṣād devī śatarūpā vyajāyata ,
priyavratottānapādaḥ prasūtyākūtisaṃjñitam .

kanyādvayaṃ ca dharmajña rūpaudāryaguṇānvitam ,

dadau prasūtiṃ dakṣāya ākūtiṃ rucaye purā . (*Viṣṇu-purāṇa* 1. 7. 17-19)

主スヴァーヤンブヴァ・マヌ神は、妻として、苦行によって汚れを除去したかの女性シャタルーパーを娶った。その男性（スヴァーヤンブヴァ・マヌ）とシャタルーパー女神は、プリヤヴラタとウッターナパーダ〔という息子〕たちとプラスーティとアーケーティと呼ばれる美貌と寛大さと徳をそなえた二人の娘たちをもうけた。ダルマを知る者よ。その後、彼はプラスーティをダクシャに、アーケーティをルチに与えた²⁵。

śatarūpām tu vairājñīṃ virājam aṣṛjat prabhuḥ .

svāyaṃbhuvāt tu vairājñī śatarūpā tv ayonijā ,

lebhe putradvayaṃ puṇyā tathā kanyādvayaṃ ca sā .

uttānapādo hy varo dhīmāñ jyeṣṭhaḥ priyavrataḥ ,

jyeṣṭhā variṣṭhā tv ākūtiḥ prasūtiś cānujā smṛtā .

upayame tad ākūtiṃ rucir nāma prajāpatiḥ ,

prasūtiṃ bhagavān dakṣo lokadhātrīṃ ca yoginīm . (*Liṅga-purāṇa* 5. 15b-18)

神は、ヴァイラージュニー（ヴィラージュの妻）であるシャタルーパーとヴィラージュを創った。ヴァイラージュニーであるシャタルーパーは、スヴァーヤンブヴァから〔生まれたのであって〕子宮から生まれたのではない。高德の彼女は2人の息子と2人の娘を得た。兄はプリヤヴラタで、〔弟は〕非常に賢いウッターナパーダである。そして、姉は最高に素晴らしいアーケーティ、妹はプラスーティであるとされる。そして、ルチという名の創造主はアーケーティと、更にダクシャ神は世界の創造者でありヨーガ行者であるプラスーティと結婚した。

H. 女性部分がダクシャの娘になる

F3の後続要素である。F3において女神とされた者がダクシャの娘になる、もしくはダクシャに敬われるという内容である。ダクシャとは、Bの要素においてマリーチたちと共にブラフマーによって創られた聖仙の1人であるとされ、Gにおいては男性半身スヴァーヤンブヴァの娘プラスーティを妻にするとされる。

H1. 半身から生まれた女神がダクシャの娘になる。

tām āha bhagavān brahmā dakṣasya duhitā bhava .

sāpi tasya niyogena prādur āsīt prajāpateḥ ,

niyogād brahmaṇo dakṣo dadau rudrāya tām satīm .

dākṣiṃ rudro 'pi jagrāha svakīyām eva śulabhṛt . (*Skanda-purāṇa*7. 2. 9. 10b-12a)

ブラフマー神は彼女に「ダクシャの娘になれ。」と言った。彼女は彼（ブラフマー）の命令により、創造者（ダクシャ）から生じた。ダクシャはブラフマーの命令により、ルドラにかのサティーを与えた。三叉戟を持つ者であるルドラも、その人自身（ルドラ）であるダクシャの娘を受け入れた²⁶。

putrikṛtā satī yā sā mānasī śivasambhavā ,

dakṣeṇa jagatām dhātrī rudram evāsthītā patim .

ダクシャによって娘として受け入れられたサティーは心から生まれた吉祥な（śiva）生まれである。世界の創造者（サティー）は、ルドラを夫として、受け入れた。

tām dṛṣṭvā bhagavān brahmā dakṣamālokya suvratām .

bhajasva dhātrīm jagatām mamāpi ca tavāpi ca ,

punnāmno narakāt trāti iti putre tv ihoktitaḥ .

praśastā tava kāmteyaṃ syāt putrī viśvamāṭṛkā ,

tasmāt putrī satī nāmnā tavaiśā ca bhaviṣyati .

evem uktas tadā dakṣo niyogād brahmaṇo muniḥ ,

labdhvā putrīm dadau sākṣāt satīm rudrāya sādaram . (*Liṅga-purāṇa*5. 27, 30b-33)

彼（ルドラ）を見てからブラフマー神はダクシャを見て、「私のものであり、また汝（ルドラ）のものでもある、世界の創造者にして、良く戒律を守る〔彼女〕を崇めよ。putra〔の語源〕が「puṃs（人）に由来し、地獄から救う（trāti）」とここで言えるならば〔putrīも同様の意味を持ち〕²⁷、この娘は汝（ルドラ）の妻であり、世界の母として賞賛されるであろう。それ故、彼女は、サティーという名で汝（ダクシャ）の娘となるであろう。」このように言われた聖仙ダクシャは、ブラフマーの命により娘を得て、そのまま、敬意を示して、ルドラにサティーを与えた。

brahmovāca .

carācaravivṛddhyartham īśenaikena sarvage ,

dakṣasya mama putrasya putrī bhava bhavāmbike .

ブラフマーは言った。

遍在する母よ。イーシャ（シヴァ）1人と一緒になって、動くものや動かないものを繁

榮するために、我が息子ダクシャの娘となれ。存在の母よ。

śiva uvāca .

tapasārādhitā devi brahmaṇā parameṣṭhnā ,

prasannā bhava suprītyā kuru tasyākhilepsitam .

tām ājñam parameśasya śirasā pratigṛhya sā ,

brahmaṇo vacanād devī dakṣasya duhitābhavat . (*Śiva-purāṇa*3. 3. 22, 26-27)

シヴァは言った。女神よ。パラメーシュティンであるブラフマーによって、〔あなたは〕苦行で創られた。〔それに〕満足せよ。喜んで彼の全ての願いをなせ。かの女神は、最高神のその願いを、頭を〔下げて〕受け入れ、ブラフマーの言葉に従って、ダクシャの娘になった。

H2. 半身から生まれた女神がダクシャに敬われる。

prāg uktā tu mahādevī strī saiveha satī hy abhūt ,

hitāya jagatām devī dakṣeṇārādhitā purā . (*Liṅga-purāṇa*70.327)

そして、以前に述べたマハーデーヴィーが、世界の幸福のために、この世界でサティーという女性になった。その女神は、ダクシャによって以前から敬われていた者である。

II. 8つの要素の配置から見る物語全体の流れの3パターン

ここから物語全体に目を移していく。物語全体の流れの中に、分類した要素を配置したものを以下に示す。

表2 12か所の記述における8つの要素の詳細な配置（横軸は物語の流れを示す。）

<i>Varāha-purāṇa</i> 2. 42-52		A 6	B 3	C 1		D 1		E 1			
<i>Vāyu-purāṇa</i> 9. 61-77		A 1	B 1	C 1		D 1		E 1	F 3		
<i>Liṅga-purāṇa</i> 41. 7-14		A 2		C 3		D 3			F 3		
<i>Liṅga-purāṇa</i> 41. 37-48		A 3		C 1		D 5		E 1	F 3		
<i>Viṣṇu-purāṇa</i> 1. 7. 1-20		A 1	B 1	C 1		D 1		E 2	F 1	G	
<i>Padma-purāṇa</i> 1. 3. 166-180		A 1	B 1	C 1		D 1		E 2	F 1	G	
<i>Mārkaṇḍeya-purāṇa</i> 50. 3-18		A 1	B 1	C 1		D 1		E 2	F 1	G	
<i>Kūrma-purāṇa</i> 1. 10. 88-11. 16	B 2	A 3		C 2		D 1		E 1	F 3		H 1
<i>Śiva-purāṇa</i> 3. 3. 2-29		A 4		C 3		D 4			F 3		H 1
<i>Skanda-purāṇa</i> 7. 2. 9. 1-17		A 6		C 2		D 1		E 1	F 3		H 1
<i>Liṅga-purāṇa</i> 70. 314-329		A 5		C 4		D 4		E 1	F 3		H 2
<i>Liṅga-purāṇa</i> 5. 9-33	B 3				G	D 2	F 2	E 1			H 1

以上のように、全体の流れを見ると、おおよそ3パターンに分類できることが分かる。

【パターン1】基本形：欠落している要素もあるが、全ての記述に共通して含まれる要素の配列パターンである。故にこの神話の基本となる形であると言える。

A. ブラフマーによる人類創造の開始

↓

C. ルドラの出現

↓

D. ルドラによる男女への分裂

↓

E. 分裂した男性部分についての説明

↓

F. 分裂した女性部分についての説明

該当記述：*Varāha-purāṇa*2. 42-52；*Vāyu-purāṇa*9. 61-77；*Liṅga-purāṇa*41. 7-14；*Liṅga-purāṇa*41. 37-48

【パターン2】マヌとシャタルーパー型：物語の結末で、男性半身マヌが、シャタルーパーという女性を娶り、その夫婦から生まれる子孫が繁栄していくという流れになるパターンである。この結末はブラフマーが創造のために男女に分裂する神話²⁸と同じ内容であるため、ブラフマーが行っていた男女に分裂する創造者という役割がシヴァに移行したことを示していると言える。

A. ブラフマーによる人類創造の開始

↓

B. ブラフマーによる他の者達の創造

↓

C. ルドラの出現

↓

D. ルドラによる男女への分裂

↓

E. 分裂した男性部分についての説明

↓

F. 分裂した女性部分についての説明

↓

G. 男性部分マヌのその後の系譜

該当記述：*Viṣṇu-purāṇa*1. 7. 1-20；*Padma-purāṇa*1. 3. 166-180；*Mārkaṇḍeya-purāṇa*50. 3-18

【パターン3】ダクシャ登場型：物語の結末で、女神となる女性半身が、ダクシャの娘になったりなど、ダクシャという聖仙が登場してくるパターンである。

A. ブラフマーによる人類創造の開始

↓

C. ルドラの出現

↓

D. ルドラによる男女への分裂

↓

E. 分裂した男性部分についての説明

↓

F. 分裂した女性部分についての説明

↓

H. 女性部分がダクシャの娘になる

該当記述：*Kūrma-purāṇa*1. 10. 88-11. 16；*Śiva-purāṇa*3. 3. 2-29；*Skanda-purāṇa*7. 2. 9. 1-17；*Liṅga-purāṇa*70. 314-329

【その他】*Liṅga-purāṇa*5. 9-33：この記述は【パターン2】の要素も【パターン3】の要素も含んでいる。加えて、アルダナーリーシュヴァラという比較的后期になって付けられたとされる名が出てくる。そのため比較的新しく書かれたものの可能性が大きい。

以上を踏まえた上で、物語の変遷の順序を推測すると以下のようなになる。

①【パターン2】先行して作られたとされるブラフマーによる男女分裂型の創造神話の内容を受け継いでいるため、最初期に作られた物語の可能性が高いと言える。

↓

②【パターン1】基本形ゆえどの記述にも当てはまる形なのだが、ここでは分裂した男女がそれぞれ神（シヴァ）と女神（基本的にシヴァの配偶神）になっている。これは【パターン2】に登場するマヌとシャタルパーの影響が弱まり、新たにシヴァとその妻からなるアルダナーリーシュヴァラという存在の確立が始まっていることを示しているだろう。

↓

③【パターン3】ダクシャという存在が現れ、女神に関わってくる。これは他のパターンには見られなかった要素であり、後から介入した可能性が高い。さらにシヴァと女神の夫婦関係に関する記述も増え、アルダナーリーシュヴァラの役割の確立や性格の多様性が示されている。

終わりに

本論文では、プラーナ聖典の12か所の記述を用いて、分裂型アルダナーリーシュヴァラの創造神話の類型を分析した。神話の起点を「A. ブラフマーによる人類創造の開始」に置き、「B. ブラフマーによる他の者達の創造」、「C. ルドラの出現」、「D. ルドラによる男女への分裂」、「E. 分裂した男性部分についての説明」、「F. 分裂した女性部分についての説明」、「G. 男性部分のその後の系譜」、「H. 女性部分がダクシャの娘になる」という、物語の根幹に関わる8つの要素を取り上げ、それぞれを似た内容ごとに分類した。それから、物語全体へと目を移し、上記の8つの要素の有無や内容、配置などから物語の流れが3パターンに分類できると判断した。【パターン1】基本形、【パターン2】マヌとシャタルーパー型、【パターン3】ダクシャ登場型である。最後にこれらのパターンの変遷について考察した。先行するとされるブラフマーの神話と同じ内容を持つ【パターン2】から始まり、基本形の【パターン1】へと移った後、【パターン3】においてダクシャという新しい要素の介入が起こる。アルダナーリーシュヴァラが創造のために男女に分裂する神話はこのような形で発展をしていったと考えられる。

「創造」のために「分裂」するアルダナーリーシュヴァラは、アルダナーリーシュヴァラの最初期の形態ではないかと言われている。それは数少ない先行研究の中でも一致した見解である。アルダナーリーシュヴァラ神話の全体像を見極めるならば、今後は「創造」のためでない形態、「分裂」しない形態など様々なアルダナーリーシュヴァラ神話を研究していかなくてはならない。そして、それぞれの類型を割り出し、関係性を調べて、アルダナーリーシュヴァラの系統図を描くことが必要であろう。

¹ [Rocher 1986] によると、*Vāyu-purāṇa* : 4～5世紀に成立と推測。*Varāha-purāṇa* : ヴィシュヌ崇拝に関して記述。成立は10世紀以前。*Viṣṇu-purāṇa* : パーンチャラートラ派の文献。パンチャラクシャナを完全に具える。アーンドラ地方で編纂と推定。*Kūrma-purāṇa* : Hazraによると8世紀前半に編纂。シヴァ派とヴィシュヌ派が混同。*Śiva-purāṇa* : オリジナルは12編から成り、様々な時代・地域に書かれた。*Skanda-purāṇa* : プラーナ聖典中で最長。一般的には1つの名称を持つ多数の作品群と考えられる。*Padma-purāṇa* : ベンガル版と西方版がある。多くの出版物は西方版だが、ベンガル版がオリジナルと言われる。Hazraは9～10世紀にベンガル地方の東で成立と推測。*Mārkaṇḍeya-purāṇa* : 最古の部分に含まれる第50章はPargiterによると3世紀以前に成立。全体ではKaneによると4～6世紀。*Liṅga-purāṇa* : リンガの姿をしたシヴァ神への信仰を示す文献。5～9世紀に書かれ始め、遅くとも1000年には成立と推定。

² cf. *Vāyu-purāṇa* 9. 61 ; *Padma-purāṇa* 1. 3. 166 ; *Mārkaṇḍeya-purāṇa* 50. 3b-4

³ namostuをnamo 'stuに訂正。

⁴ sthithoḥamをsthito 'haṃに訂正。

⁵ sanakam ca sanandanamはサナトクマーラの形容詞としたが、サナカとサナダナを再度記述している可能性もある。

- ⁶ cf. *Mārkaṇḍeya-purāṇa*50. 4-5, 6b-8 ; *Viṣṇu-purāṇa*1. 7. 4-5, 9-11a ; *Padma-purāṇa*1. 3. 167-168a, 169-171a
- ⁷ Aの記述参照。
- ⁸ cf. *Varāha-purāṇa*2. 43
- ⁹ brahmaṇobhūnをbrahmaṇo 'bhūnに訂正。
- ¹⁰ brahmaṇobhūtをbrahmaṇo 'bhūtに訂正。
- ¹¹ cf. *Padma-purāṇa*1. 3. 170b-173 ; *Varāha-purāṇa*2. 48-49a ; *Mārkaṇḍeya-purāṇa*50. 9-10a
- ¹² tehamをte 'hamに訂正。
- ¹³ strīpuṃrūpobhavatをstrīpuṃrūpo 'bhavatに訂正。
- ¹⁴ strīpuṃrūpobhavatをstrīpuṃrūpo 'bhavatに訂正。
- ¹⁵ cf. *Varāha-purāṇa*2. 49b-50a ; *Viṣṇu-purāṇa*1. 7. 13b-14a ; *Padma-purāṇa*1. 3. 174 ; *Skanda-purāṇa*7. 2. 9. 7 ; *Mārkaṇḍeya-purāṇa*50. 10b-11a
- ¹⁶ adhanārīśvaroをardhanārīśvaroに訂正。
- ¹⁷ adhanārīśvaroをardhanārīśvaroに訂正。
- ¹⁸ cf. *Varāha-purāṇa*2. 50b ; *Kūrma-purāṇa*1. 11. 4b ; *Skanda-purāṇa*7. 2. 9. 8a ; *Vāyu-purāṇa*9. 70b ; *Liṅga-purāṇa*70. 326a ; *Liṅga-purāṇa*5. 29b
- ¹⁹ saumyāsomyaisをsaumyāsaumyaisに訂正。
- ²⁰ cf. *Viṣṇu-purāṇa*1. 7. 14b, 15b ; *Padma-purāṇa*1. 3. 175a, 176a
- ²¹ saumyāsomyaisをsaumyāsaumyaisに訂正。
- ²² cf. *Viṣṇu-purāṇa*1. 7. 15a ; *Padma-purāṇa*1. 3. 175b
- ²³ cf. *Skanda-purāṇa*7. 2. 9. 9b-11
- ²⁴ cf. *Vāyu-purāṇa*9. 76b-77b
- ²⁵ cf. *Padma-purāṇa*1. 3. 177b-179 ; *Mārkaṇḍeya-purāṇa*50. 14-16
- ²⁶ cf. *Kūrma-purāṇa*1. 11. 9-10
- ²⁷ 意味が不確定なので英訳を参照した。
- ²⁸ 本論文で扱っている神話に先行するとされる。詳しくは〔澤田 2010〕参照。

文献

プラーナ聖典（テキストと英訳）

The Kūrmamahāpurāṇam. Delhi : Nag Publishers, 1983.

The Kūrma-purāṇa Part 1. Translated by A Board of Scholars, Edited by J. L. Shastri. Ancient Indian Tradition and Mythology Vol. 20. Delhi : Motilal Banarsidass, 1981.

The Liṅgamahāpurāṇam. Delhi : Nag Publishers, 1989.

The Liṅga-purāṇa Part 1. Translated by A Board of Scholars, Edited by J. L. Shastri. Ancient Indian Tradition and Mythology Vol. 5. Delhi : Motilal Banarsidass, 1973.

The Mārkaṇḍeya purāṇa. Edited by Banerjea, K. M.. Bibliotheca Indica Volume29. Calcutta : Bishop's College Press, 1862.

The Mārkaṇḍeya purāṇa. Translated with notes. by Pargiter, F. E.. Bibliotheca Indica.

Calcutta : The Asiatic Society, 1904.

The Padmamahāpurāṇam. Delhi : Nag Publishers, 1984.

The Padma-purāṇa Part 1. Translated by A Board of Scholars, Edited by G. P. Bhatt.
Ancient Indian Tradition and Mythology Vol. 39. Delhi : Motilal Banarsidass, 1988.

The Padma-purāṇa Part 10. Translated by A Board of Scholars, Edited by G. P. Bhatt.
Ancient Indian Tradition and Mythology Vol. 48. Delhi : Motilal Banarsidass, 1992.

The Śivamahāpurāṇam Part 1. Delhi : Nag Publishers, 1986.

The Śiva-purāṇa Part 3. Translated by A Board of Scholars, Edited by J. L. Shastri .
Ancient Indian Tradition and Mythology Vol. 3. Delhi : Motilal Banarsidass, 1969.

Skandamahāpurāṇam. Chowkhamba Sanskrit Series 111. Varanasi : Chowkhamba Press, 2003.

The Skandamahāpurāṇam. Delhi : Nag Publishers, 1987.

The Varāha purāṇa. Bibliotheca Indica. Calcutta : The Asiatic Society, 1893.

The Varāha-purāṇa Part 1. Translated by A Board of Scholars, Edited by J. L. Shastri.
Ancient Indian Tradition and Mythology Vol. 31. Delhi : Motilal Banarsidass, 1985.

The Vāyumahāpurāṇam. Delhi : Nag Publishers, 1983.

Vāyupurāṇam. Ānandāśramasamskṛtagranthāvalih 49. 1983.

The Vāyu-purāṇa Part 1. Translated by A Board of Scholars, Edited by G. P. Bhatt .
Ancient Indian Tradition and Mythology Vol. 4. Delhi : Motilal Banarsidass, 1987.

The Viṣṇumahāpurāṇam. Delhi : Nag Publishers, 1985.

The Viṣṇu purāṇa : A system of Hindu Mythology and Tradition. Book 1. Translated by
H. H. Wilson. Delhi : Nag Publishers, 1980.

参考文献

[Dikshitar 1995] Dikshitar, V. R. Ramachandra. *The Purāṇa Index* Vol. 1. 1st ed. Madras, 1951. Reprint. Delhi : Motilal Banarsidass, 1995.

[Hazra 1940] Hazra, R. C. *Studies in The Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs*.
Delhi, Patna, Varanasi : Motilal Banarsidass, 1940.

[Kramrisch 1981] Kramrisch, Stella. *The Presence of Śiva*. Princeton University Press,
1981. Indian ed. Delhi : Motilal Banarsidass, 1988.

[Mani 1975] Mani, Vettam. *Purāṇic Encyclopaedia*. Delhi : Motilal Banarsidass, 1975.

[O'Flaherty 1973] O'Flaherty, Wendy Doniger. *Śiva : The Erotic Ascetic*. Oxford, New
York, Toronto, Melbourne : Oxford University Press, 1973.

[O'Flaherty 1980] O'Flaherty, Wendy Doniger. *Women, Androgynes, and Other Mythical*

Beasts. Chicago, London : The University of Chicago Press, 1980.

[Rocher 1986] Rocher, Ludo. *The Purāṇas*. (*A History of Indian Literature* Vol. 2. *Epic and Sanskrit Religious Literature* Fasc. 3) Wiesbaden : Harrassowitz, 1986.

[Yadav 2001] Yadav, Neeta. *Ardhanārīśvara in Art and Literature*. Delhi : D. K. Printworld, 2001.

[澤田 2010] 澤田容子「ブラフマーによる男女分裂型創造神話の考察」『東洋大学大学院紀要』第46集（文学研究科）、2010年3月、81～101頁.

Creation myth of Ardhanārīśvara by splitting

SAWATA, Yoko

Ardhanārīśvara, the androgynous form of Śiva, plays many roles in Hindu myth. One of these is the Creator splitting into a man and a woman. In this paper, I trace how the myth of ardhanārīśvara as the splitting Creator developed.

At first, applicable 12 myths are extracted from 9 Purāṇas : *Vāyu-purāṇa*, *Varāha-purāṇa*, *Viṣṇu-purāṇa*, *Kūrma-purāṇa*, *Śiva-purāṇa*, *Skanda-purāṇa*, *Padma-purāṇa*, *Mārkaṇḍeya-purāṇa* and *Liṅga-purāṇa*.

Next, fundamental and common 8 elements are drawn out of the 12 myths and investigated.

8 elements :

- A. To start to create the humanrace by Brahmā.
- B. To create other beings by Brahmā.
- C. The birth of Rudra.
- D. To split into a man and a woman by Rudra.
- E. An explanation for a man-half.
- F. An explanation for a woman-half.
- G. Genealogy of a man-half.
- H. A woman-half become a daughter of Dakṣa.

Therefore by an arrangement of 8 elements in each myth, these myths are classified into 3 patterns.

3 patterns :

1. A basic model : The type of common for all myths.
2. The pattern of Manu and Śatarūpā : The type containing the element G (Genealogy of a man-half). The element G is similar to the element of Brahmā's myth splitting into a man and a woman in order to create.
3. The pattern of the appearance of Dakṣa : The type containing the element H (A woman-half become a daughter of Dakṣa).

In conclusion, the developmental process is Pattern2 → Pattern1 → Pattern3, by reasons that Brahmā's myth precede this myth and Dakṣa's appearance is a new element.